

04-2 日本の作業療法士にとって国際協力に参加する意義 —国際人道援助団体での活動を振り返り—

○勝田 茜(OT)

姫路獨協大学 医療保健学部 作業療法学科

Key word : 国際協力, 作業療法, 役割

【はじめに】2012年から2016年までの4年間、ドイツ国際平和村(以下、平和村)で活動した。平和村は1967年に「紛争で被害を受けた地域や危機的状況にある地域の子どもたちを助けたい」という思いのもとに立ち上げられた人道援助団体である。2019年現在、中央アジア諸国をはじめ発展途上国の子どもを対象に医療支援を行っている。

【目的】今回、平和村での活動を報告し、本邦の作業療法士にとって国際協力に参加することの意義を検討する。今回の報告に対して団体の同意を得ている。

【活動紹介】平和村の医療支援は、母国で治療が困難な子どもを渡独させ、ヨーロッパ内の医療機関で治療を提供している。治療が終了した子どもは帰国させている。平和村の施設には、治療前後、治療期間中の一時退院の子どもが滞在している。平和村における作業療法士の主な役割は1)施設に滞在している子どもへの作業療法、2)他職種へのリハビリテーション(以下、リハビリ)の啓蒙、3)平和村のリハビリマネジメントであった。

- 1) 子どもへの作業療法では、対象疾患は慢性骨髄炎が最も多く、火傷、先天性の奇形などであった。施設内には常時200人前後の子どもが滞在し、作業療法の対象となる子どもは約120~160人程度であった。1日に50人前後の作業療法を実施した。
- 2) 他職種へのリハビリの啓蒙。平和村に常勤する療法士は1名であった。平和村は医療機関ではないため職員は保育士、幼稚園教員、社会福祉士など職種は様々であった。そのため職員間でリハビリに対する知識や認識に差があった。子どもの作業療法を効率的に実施するためにも他職種の職員に対しリハビリの意義について理解及び協力が得られるよう働きかけが必要であった。その手段の一つとして情報共有を積極的に行った。

- 3) 平和村のリハビリマネジメント。平和村には常勤で働く職員の他にPraktikantと呼ばれる一定期間のボランティアや、登録ボランティアがいた。その中には、理学療法士や作業療法士の資格を有する者もあり、子どもへの理学療法及び作業療法を共に行った。参加の頻度や形態が異なるボランティアに対し、どのボランティアに、どの日に、どの子どもを担当してもらうかなどをマネジメントした。

【考察】平和村では、日本で見ることが無い症例と対面することが多かった。そして、子どもたちはもちろんスタッフもリハビリの必要性を十分に理解していない環境で作業療法を実施する必要があった。そのような中、活動を実施していくためには結果を出すことが重要であった。結果とは変化であり、作業療法を実施することでADLや運動機能、精神状態に変化することを示した。そのことで作業療法の意義を子ども及びスタッフが理解し協力が得られるようになった。また、平和村での活動を通して全身状態を把握する事の重要性を感じる事が多かった。栄養状態が悪い子どもが転倒した際の骨折のリスクや併存疾患に鎌状赤血球症を有する子どもの体調管理など、現病の疾患のみではなく全身状態を把握し検討することが治療の経過を見通すのに重要であると改めて学んだ。国際協力の分野での活動では、日本で知識としても得ており臨床の現場でも実行しているはずの他職種とのコミュニケーションや全身状態の把握、疾患の理解など基本的なことを改めて必要と感じ実施するために試行錯誤した。

今後、本邦の作業療法士には地域など活動の場が広がる事が予想される。従来とは異なる環境で、本来の作業療法士としての役割を發揮できる能力が求められる。国際協力の分野で経験を積むことは、今後の日本の社会で活動する上でも役立つと考える。